

平成 29 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
【西日本エリア（京都）】
実施報告

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象としているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていたことから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成 27 年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

しかし同時に、次期学習指導要領や大学入学者選抜改革を含めて国が進める英語教育改革に係る最新の情報が、私立学校には十分に伝わっていない実情もあり、私立学校教員は公立学校教員に比べ情報量が少ない故に埒外に置かれた感はありません。

ついでに、私立学校においても、外国語(英語)教員の外国語(英語)力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、当研究所では、平成 27 年度より専門家の指導による特別研修「外国語(英語)教育改革特別部会」を実施しており、平成 29 年度も引き続き、専門家の指導に上記の「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップを加えて、研修を実施することとしました。

当部会【西日本エリア(京都)】では、初日は龍谷大学付属平安中学高等学校を会場に、英語の授業等の視察、視察校の教員を交えて意見交換等を行います。同校は探究学習及びアクティブ・ラーニングの開発と、教育活動全般の改善に取り組んでおり、入試対策としてだけでなく、ツールとして「使う」ことを前提とした英語教育を実践しています。翌日は市内のメルパルク京都において、立教大学経営学部国際経営学科教授・松本茂氏による講演、私学の新しい英語教育の中核を担うべく文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップを行います。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める多彩なプログラムを用意しています。

◆ 会 期 ◆ 平成30年2月23日（金）～24日（土）

◆ 会 場 ◆ 龍谷大学付属平安中学高等学校（23日）京都市下京区大宮通七条上ル御器屋町 30
メルパルク京都（24日）京都市下京区洞院通七条下ル東塩小路 676-13

◆ 参加人員 ◆ 48名

◆ 参加対象 ◆ 私立中学高等学校の英語科教員（ワークショップは英語で行われます。）

◆ プログラム ◆

- ①研究授業 龍谷大学付属平安中学高等学校（授業視察）
- ②実践報告 テーマ 「21 世紀型スキルを見据えた英語教育の展開ー龍谷平安の場合ー」
報告者 平井 正朗 龍谷大学付属平安中学高等学校 校長補佐
- ③質疑応答・意見交換会 グループでの意見・情報交換を通して課題を探究します。
- ④講演 演 題 「英語教育の改善に向けて私学ができること、すべきこと」
講 師 松本 茂 立教大学経営学部国際経営学科 教授
- ⑤ワークショップ ※ワークショップ後にグループに分かれて意見交換会を行います。
テーマ「英語で授業のヒント Teaching English in English」
指 導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者

◆ 日程概要 ◆

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	30				15		30	45	
2月23日(金) 龍谷大学付属 平安中学高等学校	※「English Day」視察 (希望者のみ)			受付	開 会 式	①研究授業		② 実践 報告	③ 質疑応答 意見交換会
2月24日(土) メルパルク京都		④講演	⑤ ワークショップ	昼食	⑤ ワークショップ		意見交換会	閉 会 式	

※視察校独自プログラムのため、希望者制です。なお、視察校への申込みは不要です。

◆ 日程表 ◆

2月23日(金)

〔会場 龍谷大学付属平安中学高等学校〕

10:00	「English Day」 ※劇やプレゼンテーション等を全て英語で行う、龍谷大学付属平安中学校の三重大行事。(希望者のみ)	
12:00	受付	正面玄関入り口
13:00	開会式 司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長 1. 開式 2. 主催者挨拶 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉田 晋 3. 視察校代表挨拶 龍谷大学付属平安中学高等学校 校長 燧土 勝徳 4. 日程説明 龍谷大学付属平安中学高等学校 校長補佐 平井 正朗 5. 閉式	
13:30	◆研究授業 (授業は各教室で行います。) 5限目(13:30～14:20)	
	学年・クラス・授業名	授業者
	コミュニケーション英語Ⅱ 高2-11(一貫選抜コース)	村 上 幸 一
	コミュニケーション英語Ⅱ 高2-3(プログレスコース・グローバル英語専修クラス)	花 谷 昌 史
14:30	6限目(14:30～15:20)	
	学年・クラス・授業名	授業者
	コミュニケーション英語Ⅱ 高2-5(プログレスコース)	田 嶋 博 樹
	コミュニケーション英語Ⅱ 高2-10(一貫選抜コース)	村 上 幸 一
15:30	◆実践報告 司会 外国語(英語)教育改革特別委員 テーマ 「21世紀型スキルを見据えた英語教育の展開ー龍谷平安の場合ー」 報告者 平井 正朗 龍谷大学付属平安中学高等学校 校長補佐	
16:00	◆質疑応答・意見交換会 研究授業を受けての質疑応答の後、グループに分かれて意見交換を行います。 1. 質疑応答(16:00～16:30) 司会 山崎 吉朗 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 2. 意見交換会(16:30～17:00) ファシリテーター 外国語(英語)教育改革特別委員、山崎 吉朗・主任研究員	
17:00	解 散	

2月24日(土)

〔会場 メルパルク京都〕

9:30	◆講演 〔会場：5階会議室D「鞍馬」〕 司会 外国語(英語)教育改革特別委員 演題 「英語教育の改善に向けて私学ができること、すべきこと」 講師 松本 茂 立教大学経営学部国際経営学科 教授	
11:00	◆ワークショップ テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English (仮)」 ※文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者が担当します。 研修内容の一部をご紹介します、日頃の授業での活用方法を考えます。 指導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者 松 本 朋 之 実践学園中学高等学校 教諭 藤 本 鷹 正 大 分 中 学 高 等 学 校 教諭 桜 井 吾 朗 田園調布雙葉中学高等学校 教諭 森 啓 樹 愛知工業大学名電高等学校 教諭 〔会場：5階会議室D「鞍馬」／6階研修室1「茜」〕	
12:00	◆昼食	

13:00	◆ワークショップ テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English (仮)」 ※文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者が担当します。 研修内容の一部をご紹介します、日頃の授業での活用方法を考えます。 指導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者 松 本 朋 之 実践学園中学高等学校 教諭 藤 本 鷹 正 大 分 中 学 高 等 学 校 教諭 桜 井 吾 朗 田園調布雙葉中学高等学校 教諭 森 啓 樹 愛知工業大学名電高等学校 教諭 [会場：5 階会議室D「鞍馬」／6階研修室 1「茜」]
15:00	◆意見交換会 ※ワークショップに関して、講師および参加された先生方で、質疑応答を交えながら意見交換を行います。 [会場：5 階会議室D「鞍馬」／6階研修室 1「茜」]
15:50	◆閉会式 [会場：5 階会議室D「鞍馬」] 司会 外国語(英語)教育改革特別委員 1. 開式 2. 総括 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 山崎 吉朗 3. 閉式
16:00	解 散

◆ 学校紹介 ◆

龍谷大学付属平安中学高等学校 (理事長 石上 智康／校長 燧土 勝徳)

1876 年（明治 9 年）創立。共学校。中高生徒数 1,681 名。

創立以来、「浄土真宗の精神」を建学の精神とし、親鸞聖人のみ教えに基づく心の教育を謳い、宗教的情操の涵養を理想としてきた。日常の心得として、「ことばを大切に」「じかんを大切に」「いのちを大切に」という 3 つの「大切」を掲げている。

中学は、国公立大・有名私大をめざし、六カ年一貫教育を展開する「中高一貫」（高校から「一貫選抜」）、高校は、龍谷大学との高大連携プログラムを展開する「プログレス」、国公立大・有名私大をめざす「選抜特進」、甲子園全国制覇をめざす「アスリート」の計 4 コースからなり、それぞれのコース・コンセプトに合わせた教育実践を行っている。

◆ 講師プロフィール ◆

松本 茂 (まつもと しげる)

マサチューセッツ大学ディベートコーチ、神田外語大学助教授、東海大学教授などを経て、2006 年から現職。東海大学時代は付属中学・高校の教育改革・教員研修を担当。立教大学経営学部では、コミュニケーション領域の専門科目を担当するほか、英語教育と経営教育を融合した「バイリンガル・ビジネスリーダー・プログラム (BBL)」の主査を務めている。学外では、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会委員、文部科学省スーパーグローバルハイスクール (SGH) 企画評価会議書面審査部会座長、全国高校英語ディベート連盟 (HEnDA) 副理事長なども務めている。

◆ 講師・発表者・指導員 (順不同) ◆

松 本 茂	立教大学経営学部国際経営学科	教授
燧 土 勝 徳	龍谷大学付属平安中学高等学校	校長
平 井 正 朗	龍谷大学付属平安中学高等学校	校長補佐
松 本 朋 之	実践学園中学高等学校	教諭
藤 本 鷹 正	大 分 中 学 高 等 学 校	教諭
桜 井 吾 朗	田園調布雙葉中学高等学校	教諭
森 啓 樹	愛知工業大学名電高等学校	教諭
吉 田 晋	富士見丘中学高等学校	理事長・校長

◆ 特別委員・指導員 (順不同) ◆

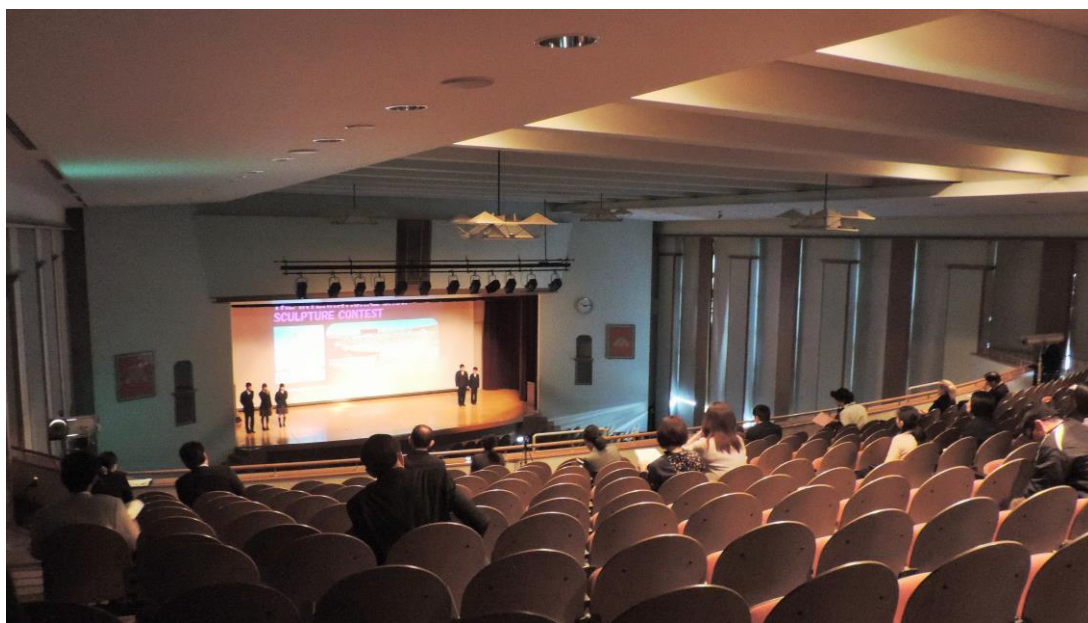
平 方 邦 行	工学院大学附属中学高等学校	校長
平 井 正 朗	龍谷大学付属平安中学高等学校	校長補佐
浜 野 能 男	普連土学園中学高等学校	教頭
原 田 貴 之	愛 知 中 学 ・ 高 等 学 校	教諭
川 本 芳 久	一般財団法人日本私学教育研究所	事務局長
山 崎 吉 朗	一般財団法人日本私学教育研究所	主任研究員

外国語（英語）教育改革特別部会【西日本エリア(京都)】 実 施 概 要

平成 30 年 2 月 23 日～24 日に龍谷大学附属平安中学高等学校及びメルパルク京都を会場に開催。参加者 48 名。同校は中学・高校併設型の男女共学校で、1876 年（明治 9 年）の創立以来、「浄土真宗の精神」を建学の精神とし、親鸞聖人の御教えに基づく心の教育を謳い、宗教的情操の涵養を理想としてきた。中学は国公立大・有名私大をめざし、六カ年一貫教育を展開する「中高一貫」（高校からは「一貫選抜」）、高校は、龍谷大学との高大連携プログラムを展開する「プログレス」、国公立大・有名私大をめざす「選抜特進」、甲子園全国制覇をめざす「アスリート」の計 4 コースからなり、それぞれのコース・コンセプトに合わせた教育実践を行っている。初日は龍谷大学附属平安中学高等学校にて開会式の後、研究授業を見学。続いて平井正朗・同校校長補佐からの実践報告、研究授業を行った先生方との質疑応答の後、全体で意見交換会を行った。2 日目はメルパルク京都にて松本茂・立教大学経営学部国際経営学科教授による講演、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成 28 年度・29 年度受講者の先生方の指導による英語でのワークショップ、意見交換会が行われた。意欲溢れる参加者と熱心な講師・指導員の協力により、2 日間を通して充実した研修会となった。

English Day 2018

研修会初日の午前中に、龍谷大学附属平安中学校の三大行事の一つである English Day が同校の講堂を会場に行われた（希望者のみ参加）。生徒が主体となり、全て英語での劇やプレゼンテーションを行う様子から、楽しみながら英語を使おうとする、意欲的で積極的な姿勢が窺われた。



開会式

開会にあたり山崎吉朗・当研究所主任研究員は、視察校である龍谷大学附属平安中学高等学校の先生方に運営協力の感謝を述べ、次のように挨拶した。「現行の学習指導要領より『英語による英語の授業』と明記され、慌てて対応したという経緯がある。英語教育推進リーダー中央研修（以下、「リーダー研修」）の大幅に予算が削減され、私学だけの特別枠はなくなったが、公立の参加者と一緒に受講された 2 名の先生方が初めてワークショップの指導に当たる。また、これから視察する研究授業は、当研修会のために特別に組まれた授業ではない、普段通りの授業で、龍谷大学附属平安中学高等学校の先生方の取り組みから、先生方自身に取り入れられる工夫やヒントを是非見つけて持ち帰ってほしい。」



山崎吉朗・当研究所主任研究員

続いて、燧土勝徳・龍谷大学付属平安中学高等学校校長より視察校代表として、次のように挨拶があった。「本校は浄土真宗の精神を建学の精神とし、一昨年に創立 140 年を迎えた。龍谷総合学園として、日本全国、世界はハワイまで 24 学園 69 校を組織し、その中でいかに建学の精神を醸成し伝播していくか、模索しながら学校教育を展開している。先生方には本校の平生の授業をご覧いただき、忌憚のないご意見、ご感想を寄せていただきたい。本研修会が先生方にとって実りあるものとなるよう、祈念している」



燧土勝徳・龍谷大学付属平安中学高等学校校長

研究授業

研究授業は、プログレスコース、プログレスコース・グローバル英語専修クラス、一貫選抜コースの 3 クラスの 5 時間目・6 時間目の授業を見学した。ペアワークとグループワークを中心に、一人一人の生徒が熱心に話者への耳を傾け、発言し、能動的に授業に臨んでいる様子が印象的であった。参加者からは、「先生方の指示が生徒によく伝わっていると感じ、生徒の気風の良さも伝わってきて清々しい授業だった」、「先生方のスキルの高さと生徒の意欲、どちらも素晴らしいものだった」との感想が数多く寄せられた。



実践報告

平井正朗・龍谷大学付属平安中学高等学校校長補佐より『21 世紀型スキルを見据えた英語教育の展開－龍谷平安の場合－』と題し実践報告が行われた。同校の沿革、進路実績、カリキュラム編成、英語の授業について紹介された。

1876 年に滋賀県彦根に西本願寺系寺院の子弟教育のために金亀教校として創設され、現在は京都市下京区に位置する。2015 年に龍谷大学と法人合併した。生徒数は中高合わせて約 1,700 名、男女比は 6 : 4、大学進学率は約 90%、クラブ活動も活発である。コース・コンセプトは 4 つに分かれ、アスリートコース（甲子園全国制覇を目標とする硬式野球部だけのコース、定員 30 名）、プログレスコース（高等学校から入学する生徒を対象とし、龍谷大学への進学を前提に高大接続のカリキュラムを学習する。定員 200 名）、一貫選抜コース（中学より入学する生徒を対象とし、難関国公立大、有名私大を目指す。定員 90 名）、選抜特進コース（高等学校から入学する生徒を対象とし、難関国公立大、有名私大を目指す。定員 100 名）である。生徒の半数以上が京都市内から通学している。高等学校においては、プログレスコースのうち、龍谷大学の特に英語が重要となる学部・学科に進学を希望する生徒を対象としたプログレス・グローバル英語専修クラスがスタートした。昨年度のデータによると、卒業生の 94%が自らの第一志望とする進路先を達成している。また、クラブ活動を推奨しており、体育系のクラブに入部した生徒も大学進学率は 98.1%であり、97.7%が第一志望とす



平井正朗・龍谷大学付属平安中学高等学校校長補佐

る進路先を達成している。2012 年から進学校化への改革を進めており、中堅国公立大学に加え、難関国公立および“京阪神”（京都大学、大阪大学、神戸大学）への志望者が増え、近年は医学部医学科や難関私大への志望者も増え、現役合格者が増加している。

中学は、到達度に応じて特進 A クラスと特進 B クラスから成り、全学年ともに 6 単位ずつ、ネイティブ・スピーカーの教員と日本人の教員によるチームティーチングを実施している。英語科の取り組みとして、「英語で英語の授業」に縛られすぎず、文法の説明など生徒により正確な理解が必要なものは日本語で行っている。肝要なのは教員が英語で教えるのではなく、生徒が英語を使う場面を設定することである。

質疑応答・意見交換会

開会時に参加者へ配付した「質問用紙」に基づき、質疑応答が行われた。平井正朗校長補佐と研究授業を担当した村上幸一教諭、花谷昌史教諭、田嶋博樹教諭が出席し、短い時間ながらも数多くの質問が寄せられ、参加者の熱意と関心の高さが窺われた。



Q1) ネイティブ・スピーカー教員の雇用、人材確保はどのようにしているのか。

A1) ネイティブ教員は現在非常勤教員 6 名。個々に細かい条件を決めて契約し、優秀な教員には長く勤務してもらえよう努力している。（平井校長補佐）

Q2) Active learning is quite a broad idea. Please tell us more about it.

A2) 簡単に説明できる質問ではないので、あとで個別に回答したい。（平井校長補佐）

Q3) 本日見学した English Day は、準備期間、予選、発表までどれくらいかけているのか。他教科教員との連携、協力についてはどうか。

A3) 中一は昨年 11 月から、3 ヶ月程度。授業の 1/3 程度を使って土台作りをする。予選は、中 1 は年明け、中 2 は夏明けから予選。出場者は去年決定済みである。3 年生は 3 週間程かける。トピックを持ち寄って選び、数の生徒が本選に出場する。クラス内予選はぎりぎりまで引っ張るようにしている。トピックについては、大枠は提示して、何について話すかは生徒が選択している。朗読やディクテーションをしてディベートの下地を作る。

プレゼンテーションのグループは、中 1 はこちらで指定するが、中 2 中 3 は仲の良い生徒同士でグループを作ってよい。聞いている生徒がどの程度理解しているかは、中 1 はほぼ理解しておらず、上級生に対して「これほど話せてすごい」と感じているが、中 3 になると概ね理解していると思う。

プレゼンテーション指導は、各学年にネイティブ教員 1 名と、日本人教員 2 名の 3 名が連携して行う。パワーポイントは、中 2 以上は自分で作成する。情報技術の時間に説明してもらう。（花谷教諭）

Q4) 先生の教授法に感心した。大半の生徒はグループワークでも集中しているが、中に参加しない生徒がいる場合どのように対応しているのか。

A 4) それは一番の課題である。徹底して音読することで理解を高めるようにしているが、CDを途中で止めて stop and say をする、クジを引いて誰があたるか分からなくようにするなど、集中力を高めるようにしている。また、音読を重視して意味の説明はあまり時間を割いていないが、グループワークで分かる生徒から分からない分を教えてもらうことで理解するなど、生徒はついてきていると思う。(村上教諭)

Q 5) 語彙指導はどのように行っているのか。

A 5) 単語テストは実施している。スピーキングにも語彙習得は必要である。若干、先生によって違うがテキストはキクタンを共通して使用している。(田嶋教諭)

Q 6) 全ての授業が英語によるものか。日本語も使うならばそのタイミングは。

A 6) 全てを英語で行うことが必ずしもよいとは考えていない。いつ、どの程度日本語を使うかは、朝と午後でも生徒の状況は違う。状況に応じた使い分けが必要である。(花谷教諭)

Q 7) 現在の授業方針は、受験指導の面から反対はなかったか。

A 7) 1レッスンをどうしているかでお答えしたい。特進コースの授業数バランスは、8時間で1サイクル、1つのレッスンを終える。6時間で徹底した音読を含む英語の教材自体の学習を行い、あと1時間で Activity 1 時間自由英作文。生徒には、こうすれば読めると分かるような教材を与えて自力で教材の英文が分かるようにしている。GTEC の結果によると、自由英作文の部分が大幅に、また安定して平均を上回っているが、リーディングセクションは平均並みである。(村上教諭)

Q 8) 家庭学習について伺いたい。予習、復習、訳のプリントは家でやるのか。

A 8) 家庭学習は課している。即興での解答は時間がかかるため、家庭で宿題としている。配布するプリントには和訳も掲載し、その文を基にさらに授業内に Activity を行うため。教科書を、ではなく教科書で教えられる授業をするため教材法理解は家庭で行う。(田嶋教諭)

Q 9) 花谷先生の授業は、個別質問を生徒がよく聞いている。クラス単位の授業で生徒が集中するコツは何か。

A 9) ペアワークを多用している。気づいても生徒の細かいミスは見逃している。正確さを求めすぎるとたくさん書かなくなってしまう。外部テストで受検しているのは GTEC のみである。英検を受けるなら高2で準2級、高3で2級の取得を目指している。色々な生徒が当たるようにペアワークの組み合わせはよく変えるが、大人数なのですべてに、目が行き届くわけではないが、授業前にこのペアにというペアを決め、そこに注目する。(花谷教諭)

Q 10) 英語に慣れているように思ったが初期からそうなるよう努力しているのか。

A 10) 中学ではチームティーチングだが、理解した部分を自分達で考える発展させるようにしている。習った部分を何とか伝えろといったことは授業を通じて訓練している。2月には English Day があるため、その促しは恒常的に行っている。(村上教諭)

Q 11) 田嶋先生が最後に課していた、自由英作文はその後どうするのか？授業はいつも英語か。

A 11) 次の授業でも使用する。書く量は多くないので、フィードバックのためチェックして返却している。また、書ける生徒、書けない生徒の差は明らかにあるので、英語だけでの授業にこだわらず、日本語で考えさせることもある。(田嶋教諭)

Q 12) 定期考査でどのような問題を出しているのか。

A 12) 高2の夏までに体系的な文法学習が終わり。理解度も毎朝の朝テストで確認している。ステップアップテストはそのテストから、Q & A をそのまま半分出題する。ただし黒板に問題は書かない。その方が生徒の頭に理解が残る。また、既習のものでなくても、文脈から考えてどの語になるかといった問題も出す。定期考査は、プログレスコースは全クラス同じ定期考査を行っている。「場所探し」「穴埋め」「チャンクもどし」「英語の定義」「整序問題」等を出題している。ライティングの定期考査では、リスニングとライティングは出題している。トピックについて述べる英作文。3年生でのディベートのため、ネガティブな意見も書かせる。字数制限を設けて、主張、理由、証拠、結論と展開していく。リスニングは初めて聞く教材で実施している。(花谷教諭)

Q 13) 発音のてこ入れはないように感じたが意図的に行っていないのか。

A 13) できるだけ CD に忠実に読むように指導しており、個々の語の発音の時間は設けていな

い。意図的にではないがそこに時間をかけてない。プログレスコースは龍谷大学への入学がゴールなので、受験勉強でなく使える英語を目指し、発音は後回しにしている。（村上教諭）

Q14) 全クラスプロジェクターはついているか。

A14) 全クラスではない。スカイプを活用している。（村上教諭）

Q15) 高2のプログレスコースで、異文化理解ではどのようなテキストを使っているのか。

A15) コミュニケーション英語で学んだ教材の理解を深めるような教材を用いている。話題はAI、ロボットなど flexible なものを選んでいる。（花谷教諭）

Q16) 英語科の教員間の意思疎通はどうか。英語科での授業の方向性は一致しているか。

A16) 年度当初にこれでいこうと確認の教科会を実施し、伝達している。英語教員の共通理解として、例えば解答用紙に日本語をたくさん書くような試験はしない、といったことがある。こうすれば少なくとも和訳をそのまま覚えても役に立たないようにできる。（花谷教諭）



講演

松本茂・立教大学経営学部国際経営学科教授より「英語教育の改善に向けて私学ができること、すべきこと」を演題として講演を行った。私学の強みと弱みを挙げ、入試改革の展望や、実践していくべき英語教育について解説され、参加者からは「今後、生徒たちがどのような英語力を身に付けないといけないのか、大学・社会の立場から説明して下さい、大変分かりやすかった」等の感想が寄せられた。

1. SWOT 分析から見る私学の英語教育



私学と言っても形態が様々である。その中で共通項を見つけながら話をしたい。ビジネスで用いられる「SWOT 分析」を私立学校に当てはめると、まず、強み（Strength）は異動が少なく、カリキュラムやクラス人数に自由度があること。そして施設が充実しており、ネイティブ教員が多いことである。逆に弱み（Weak）は、異動が少ないがために、本音が言いにくく指導法が変わりにくいこと。伝統的な受験英語指導が主に行われている学校では4技能指導に向かないことや、教科書の種類が多すぎて負担が大きいことが挙げられる。機会（Opportunity）としては、大学入試で4技能型外部試験の導入や小学校の英語教科化により中学入試に英語の導入ができ、英語の力のある生徒を入学させることができる。最後の、脅威（Threat）とは、公立の中等教育学校や付属小学校・中学校が設置され、これまで私学が強みとしてきたことを公立が行っていることである。そのうえ、教員研修の機会は公立高校の方が多く、英語に対する予算の増額もいくつかの県で行われており、公立学校がグローバル化している。グローバル教育を受けた生徒が、現在東大や阪大などの最難関国立大学の推薦入試に合格している。また茨城県や広島県では外国籍教員を教諭として採用するなど、ますます英

語に力を入れてきている。

2. 目標の明確化とコンセンサスの必要性

多くの学校現場を見ていると「誰のための、何のための英語教育で、どんな力をつけたいのか」というコンセンサスの取れていない学校が多いように感じる。もっと教科内での話し合いが必要である。理想の生徒像を描き、Can-Do リストを作成・活用し、また生徒たちが英語を体験できる機会を大切にしたい。立教大学のビジネスカレッジでは、2年先の目標を立て、それを元に各教科の Can-Do を作成している。教材はすべて自前で作成しており、評価についても、各セメスターの初めに小テストやレポート、ディスカッションなどのスケジュールと評価方法・配点を明示している。プロセスを大切にしているため、学期末の試験は評価全体の 5～10% である。毎週 1 回 1 時間の教員間会議を行うことで、共通した授業を展開している。

3. これからの英語教育と入試改革

新学習指導要領の学力 3 要素は大きな意味を持つ。英語に関しては従来から 4 技能の重要性は明記されているが、英語 4 技能を統合するためには「思考力を伸ばす英語教育」をしていかなければならない。思考力がなければ表現できない。その一方で、発言することで思考が生まれたり整理されたりするため、思考する機会を充実させることが重要である。大学入試だけでなく、高校入試でも 4 技能化、外部検定活用は始まっており、福井県では高校入試に英検を加点対象とし、受験料の補助もある。東京都では 2019 年度からスピーキングテストを実施する。

大学入試では、国立大学協会（国大協）の決定により 2020 年度からの 4 年間は国立大学では、「外部検定」+「大学入学共通テスト」+「個別テスト」の 3 種類となるが、個別テストがあるために、読解一辺倒の入試も存続している。一方、私立大学では「外部検定試験」の利用が加速化される。立教大学では全学部全学科で外部試験のみの入試を全国で初めて導入した。

共通テストでは読む・聞くしか問わないが、内容は外部検定に近くなり、リーディングの文量が増えると予想される。高校では文法、訳読中心の大学入試対策を行っているが、大学入試自体がすでに大きく変わっている。国大協では推薦・AO で定員の 30% まで増やすと発表しており、一般入試の割合はすでに私立では 50% 以下である。今後この割合は高くなっていく一方であろう。

4. PIC サイクル英語学習法

英語上達のためには量は絶対に必要で、個人の学習は欠かせない。個人でやること、授業でしかできないことを明確にし、個人学習 (Practice) から集団活動 (Interaction)、そして 実践 (Communication) へとつなげるというのが PIC サイクルである。英語はひとりではできない。たくさん読み、そして考えたうえで、集団活動を授業で行う。プレゼンテーションや国際プログラムでの実践の場があってモチベーションも上がるし、自分に足りないものがわかり、次の個人学習へのステップとなる。

大学から見ると、高校現場では定期考査を重視しすぎている。アウトプットを想定したインプットになっていない。やり甲斐のあるアウトプットの場を与え非日常を作ることが必要である。外部検定試験対策ではなく、「活動を通じた授業の成果を外部検定で測る」ことが重要で、そのような授業を行う際には、教師と生徒、生徒同士の良好な関係性が不可欠である。

5. 提案

まずは Can-Do リストを整備してもらいたい。ただ、作ることが目的ではなく討議することが大切で、その際には他者を批判しないことが肝要である。授業は対話的活動の場と位置づけ、読む力がつく「活動」を模索する。中学入試への英語導入や教材の再検討も必要であろう。また、企業や大学との連携により、生徒の思考力も伸ばす活動を開発する。その際は、ぜひ大学の力を活用してほしい。大学はコラボレーションを求めている。そうすることで、生徒はさらにモチベーションが上がるはずである。対話的な授業を行うためには、できればクラスサイズは 25 名までにすることが理想で、教員研修や先進校の授業見学をすることや、SGH 後継事業（今年 12 月には発表される予定）への応募も積極的に行って

ほしい。外部試験やポートフォリオを活用し、AO、推薦、指定校入試に対応する。さらに、ホームページや SNS をはじめ、ELEC 英語教育賞への応募などを通して、広報活動を充実させることも大切であろう。実際、いま受験者数を増やしている学校は SNS を利用している。最後に、今の先生たちは教科以外の仕事が多すぎる。例えば、教育研究コーディネーターを活用することで、仕事量を減らし、教員が授業の準備に集中できるようにしてもらいたい。

質疑応答

Q) 活動としてディベートやディスカッションを授業に入れるにあたり、40 名のクラスサイズ、さらに様々なレベルの生徒たちがいる中で活動させる時の留意点は？

A) 「やりとり」が入る以上、読むだけでなく、それをもとに話す・書く活動が欠かせない。ゆるやかな習熟度ができればよい。また、グループプレゼンテーションを取り入れ、役割を分けることで様々なレベルに対応した活動を行うことができる。

Q) 「大学入試の今後の展望は？」

A) 4 技能入試は後戻りしないであろう。なぜなら、大学では CEFR の B1 レベルで入ってもらわないとその後の大学生活についていけないし、留学や海外インターンシップにも行かせられない。国際的なチームで研究できる日本人が少ないので、英語論文数が少なく世界大学ランキングで東京大学が下がり続けていることを考えると、バランスよく英語の力を育成しなければならない。

ワークショップ・意見交換会

参加者は A グループと B グループに分かれ、「文部科学省・英語教育推進リーダー中央研修」平成 28・29 年度受講者による指導のもと、ワークショップが行われた。今回のテーマは「Classroom English」「Personalisation & Authentic Materials 1」「Personalisation & Authentic Materials 2」で、参加者からは「授業中に英語を使って活動するヒントをたくさん得られ、グループワークがあることで様々なことにチャレンジでき、考える機会にもなり良かった」、「学ぶ意識の高い先生方と知り合うことができ、大変刺激となり、有意義な時間となった」等の感想が寄せられた。ワークショップ終了後、各グループで意見交換会が行われた。



ワークショップの様子（左：A グループ、右：B グループ）

閉会式

全てのプログラムが終了し、山崎吉朗・当研究所主任研究員から総括があった。山崎主任研究員は、「公立の英語科教員向けには、各都道府県教育委員会が実施する研修が充実しているが、私学にはそうした研修がないので、本研修を存分に活用し、この二日間を通して感じ取られたことや学んだことを各学校の先生方、また各地域の学校へ還元してほしい。」と述べ、研修会を締め括った。



◆ 都道府県別参加者人数 ◆

No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数
1	北海道	0	17	石 川	0	33	岡 山	1
2	青 森	1	18	福 井	0	34	広 島	3
3	岩 手	0	19	山 梨	0	35	山 口	1
4	宮 城	1	20	長 野	0	36	徳 島	0
5	秋 田	0	21	岐 阜	0	37	香 川	0
6	山 形	0	22	静 岡	1	38	愛 媛	1
7	福 島	0	23	愛 知	9	39	高 知	0
8	新 潟	0	24	三 重	3	40	福 岡	3
9	茨 城	0	25	滋 賀	0	41	佐 賀	0
10	栃 木	0	26	京 都	6	42	長 崎	0
11	群 馬	1	27	大 阪	4	43	熊 本	0
12	埼 玉	0	28	兵 庫	4	44	大 分	0
13	千 葉	4	29	奈 良	0	45	宮 崎	0
14	神奈川	1	30	和歌山	0	46	鹿児島	0
15	東 京	1	31	鳥 取	0	47	沖 縄	0
16	富 山	0	32	島 根	3			
							計	48

◆ アンケート結果 ◆ 回収率 85.1% (40 名/47 名)

○問 1、当研修会への参加目的をお知らせください。

- ・英語教育が大きな変化を迎えるにあたり、その変化に対応する必要があるため。
- ・他校での取り組みを勉強し、ワークショップなどで経験できることを自校に還元するため。
- ・4 技能を高める為の授業開発。
- ・教授力の向上の、知見を得ること、交流。

○問 2、当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

●研究授業

- ・ペアワークによる音読、要約のさせ方、グループ対抗による発話を促す方法など大変参考になった。
- ・授業をされた先生方のスキルの高さと生徒の意欲、どちらも素晴らしいものであった。
- ・英語による授業では、分からない生徒は聞かなくなるのでは、と考えていたが、実際には、クラスの殆どが理解しようと必死に耳を傾け、頷いている様子が見られ驚いた。
- ・ペアワーク、グループワークの有効性、パワーポイントの活用が参考になった。

●実践報告

- ・英語科だけではなく、学校全体が意識を持って改善に取り組んだ姿がとてもよく分かった。
- ・リーダーシップのある運営とカリキュラム・マネジメントが印象的であった。
- ・「生徒募集の戦略」と「英語教育」について考えるよい契機となった。
- ・進学校化 6 年間での実践が素晴らしいと思う。育てたい生徒像が明確であり、それに向かうプログラム（教育活動）も素晴らしいと感じた。管理職がすべきこと、一般の教員がすべきことをしっかり見据えていた点が非常に参考になった。
- ・勉強を押しつけるのではなく、したいと思う様な取り組みが多くあり、生徒の意識向上につながっていると感じる。

●質疑応答・意見交換会

- ・色々な小さい工夫を積み重ねることで、授業を創り上げ生徒に活動させていると思った。
- ・英語を生徒が多く使用する授業を計画する留意点や現状の課題など、試行錯誤されている様子に刺激を受けた。
- ・一つ一つの質問に対し、具体的な答えを得られたので、「実際どうやるのか？」というイメージが付きやすかった。
- ・先生方が普段どの様なことを考え指導されているのか伺うことができて良かった。教員間の意識も、考查という一つの大枠を基準にして共通で持たれているのが、素晴らしいと思った。

●講演

- ・思考力を高める為に、英語を学ぶという考えがとても参考になった。
- ・アウトプットの機会を増やすということは理解していたが、「非日常を増やす」という考えは本当に新しいものだった。そこから英語の授業時以外でも何らかの形で英語に触れる機会が増えると思った。
- ・家庭学習のあり方をよく考えさせられた。授業のために何をさせるかと何をしているのかという所が、とても興味深かった。アウトプットを意識したインプットができるように、私の授業を見直したい。
- ・何にこだわり、何に自信を持ち、何に取り組めばよいのか明確化した。

●ワークショップ

- ・簡単な指示、活動をよりアクティブに充実したものにするスキルを学ぶことができた。
- ・本音を言うと、英語でワークショップというのに怯えていたが、望んでいた以上に楽しい時間だった。色々なアクティビティやペアワークがあり、時間があっという間に経ってしまった。
- ・実際に生徒の立場として授業を受けつつ学ぶことができてとても良く分かった。
- ・生徒への指示の出し方、Authentic な教材をどのように使うかなど、今後に活かせるものばかりで、大変参考になった。

●意見交換会

- ・多くの先生方の意見を聞くことで教科指導の幅を広げ、モチベーションを上げる非常に良い機会となった。
- ・他地域の教育現状を知ることができよかった。
- ・日頃感じているペアワークやグループワークなどの活動についての難しさを述べたところ、有益なアドバイスをたくさん得られた。グループで意見交換ができて話しやすかった。
- ・学校ごとに抱える問題は異なるが、何かを変えなければならないという意識は共有できた。

○問3、今後の本研修会への要望等をお書きください（例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項）。併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書きください。

- ・家庭学習と授業の活動をリンクさせる具体的な方法。
- ・定期的に土曜日や長期休暇中に1日研修でも良いので、できる限り多く開催してほしい。
- ・教科書を使い、そこから発展してできるアクティビティについて話し合うような時間を作ることができると思う。模擬授業を作るような時間があるとその後の授業実践とつながっていくように感じた。
- ・もっと頻繁にこのような研修会を開催してもらいたい。
- ・中学校教育／高校教育についてなど担当する学年でも意見交換できる機会があるとよい。